http://hokkaido-poland.com/

POLE

第101号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2020.9.1

自宅でご覧になれる ポーランド民族文化

この秋、世界的に有名な、スタニスワフ・ハディナ記念**国立民族合唱舞踊団「シロンスク」**のプロフェッショナルなダンスを通して、その美しさ、豊かな情緒と色どりで人々を魅了する、ポーランド民族文化をオンラインでお楽しみいただけます。

「シロンスク」は、ポーランド民族文化を伝えるアンバサダーであり、このたび日本の皆様を「インスピレーションあふれる舞踊～フォークロアから現代へ」プロジェクトにご招待します。

このプロジェクトでは、ポーランドの国民舞踊クラコヴィアクとポロネーズ、シロンスク地方の舞踊トロヤクを学ぶことができます。最もポーランドらしいこれらのダンスのレッスンを、オンラインで受けられるまたとないチャンスです。

舞踊団は、これらを日本中に広め、色どり豊かなポーランド文化を「桜咲く国」の隅々までお届けしたいと思います。

同時に、伝統と現代をつなぐ、バレー公演“EXODUS”も、オンラインでご覧になれます。東京のポーランド大使館で初演されたあと、日本各地で上演されます。

ぜひ**「シロンスク」**のポーランド舞踊レッスンをご覧になり、ヨーロッパのダンス文化をご堪能ください。

詳しい情報は追ってお知らせします。お楽しみに。

（ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」）

当企画は、ポーランド文化遺産省の助成を受け、人道の港敦賀ムゼウム、シアターX（カイ）、ポーランド広報文化センターがパートナーとなり、日本フォークダンス連盟、日本・ポーランド民族舞踊友好協会、北海道ポーランド文化協会、Polish Art and Science Mission in Japan、フォーラム・ポーランドのご協力をいただきます。また“EXODUS”はアダム・ミツキェビチ・インスティテュートの国際文化プログラム「ポーランド 100」の一環であり、ポーランド文化遺産省の「〈NIEPODLEGŁA 独立〉記念長期プログラム 2017-2022」の助成を受けています。

『POLE』百号に寄せて

小笠原 正明

協会創設のころ

1987 年 11 月発行の会誌『POLE』創刊号は、ワープロで印刷した紙を短冊型に切り取って台紙に貼り付けて作りました。昔、印刷所で「写真製版」と呼ばれた方法です。ポーランド人は「ポーレ」という言葉に懐かしい響きを感じるそうで、名づけ親は当時北大スラブ研究センターの伊東孝之教授です。

=写真=《第 13 回例会》吉田勝一さんを囲む会(1991.1.10)
前列左から斎田道子，吉田事務局長，吉田勝一，今村会長，相馬純吉監査委員夫人，小笠原正明のみなさん

その約1カ月前の 10 月2日に発足した、ポーランド文化協会の創設のいきさつは、北大関係者のことしか知りませんが、工学部に滞在したことがある、ウッチ工科大学学長のジェルシー・クローさんが、工学部の吉田宏教授と、文学部の灰谷慶三教授に強く働きかけて実現したと聞いています。ウッチ在住の吉田勝一さんが、その間を熱心に取り持ったはずです。音楽関係では遠藤道子先生、ほかに「連帯（ソリダールノシチ）」運動に関心をもつ人々の支援もありました。初代会長で、元北大学長の今村成和先生は、はじめ「つくる意味がよくわからない」とおっしゃっていたそうですが、北大クラーク会館で行われた準備会で、協会名に「文化」が入ることを確認された上で「わかった」と会長就任を承諾

されたそうです。重厚で、しかも率直だった、当時の今村先生の姿が思い出されます。

吉田宏先生が事務局長になった関係で、私が「ポーレ」の編集を引き受けましたが、もともと放射線化学が専門の自分には、何のアイディアも浮かばず、毎回編集には苦労しました。次々に新しいアイディアが生まれる、現在の「ポーレ」とは大違いです。それでも 1992 年に函館に転勤するまで続けたのは、ポーランドおよびポーランド人について、忘れがたい経験をしていたからです。

「連帯」運動のポーランドで

1980 年 9 月に、交換教授としてウッチ工科大学に行く少し前から、グダニスク造船所のワレサの活動が注目されていました。ポーランド到着直後に「連帯」が結成され、たちまち百万人を超える組織となりました。共産党政権の下、地下で活動していた多くの組織が一斉に動きだしたようです。政情不安となり、社会は混乱し、共産党政府はグダニスクでの「政労会議」に追い込まれました。

ウッチ工科大の職員組合は、地区の連帯組織の中核だったらしく、私の研究の相棒のストラドフスキー氏はそのリーダーだったので、私は革命組織の裏側（といっても、ポーランド語が分からなかったので、その外見だけ）を垣間見ることができました。いわば「前線司令基地」のようなもので、昼夜を問わず会議が開かれ、屈強な労働者風の人たちが連絡に走り回っていました。

ウッチ滞在中は、町はずれにある大学のゲストハウスで、イラクから来たアリージェという若い女性、リトアニアの織物学者アルフィダス、やや遅れてスコットランドから加わった数学者のデビッド、それに日本人の私という、奇妙な組み合わせで3カ月を過ごしました。日用品をはじめとして、最後には食料品まで店から姿を消し、買い物のため長い行列に加わったり、社会主義国の企業の非効率さに腹を立てたりしながら、それでも助け合って生活しました。アルフィダスの送別会は、ウッチのオペラハウスで行い、ハンガリー産のコニャックで乾杯しました。

滞在中に、鉄道で東ドイツを経由してミュンヘンに行ったときなど、封鎖中だった国境では自動小銃で武装した兵隊に取り囲まれ、難民扱いを受けました。

ちなみにこの2月に、北海道で最初に新型コロナウイルス感染のピークがきたときに、真っ先に心配したのは「北海道封鎖」です。ヨーロッパではこういう場合には、まず境界を封鎖し、鉄条網を張り、武装した軍隊を配置します。私以外にそういう事態を想像した人は、あまり多くなかったようですが。

それから四十年の月日が流れ、ストラドフスキー氏はいったん投獄され、やがて釈放されましたが、ドイツのアウトバーンで事故死しました。アリージェは、イラクに帰って湾岸戦争とイラク戦争を経験したはずです。アルフィダスは、1991 年のリトアニアの独立宣言のあと、首都ヴィルニュスで「血の日曜日」に遭遇したかも知れません。困難な時代に一緒に過ごした、ポーランド人のステファンとはいまも交流があり、一昨年、彼の長男が北大のラファウさんの研究室にインターン生として滞在しました。

1980年のポーランドでの生活は短期間でしたが、凝縮された形で当時の世界を体験しました。ポーランドには消滅寸前の本物のヨーロッパを感じさせるものが多く、人々の辛抱強さと親切さは私の故郷の人たちと同じだと思いました。ポーランドから離れられないと思うのはそのような経験によるものです。

（おがさわら・まさあき，副会長・事務局長，2020.4.13）

ウイルスに負けない

「ウッジ市日本語スピーチ大会」の試み

吉田 勝一

大阪千里国際高校生たちが、今年2月ウッジの高校を訪問する予定が、突然の新型コロナウイルス感染情報で、1月の早い段階で交流授業中止と決まった。その頃はまだポーランド側は楽観的だったが、感染拡大の波は、あれよあれよという間にヨーロッパ諸国へ広がり、ポーランドで初めての感染者確認は3月４日、ドイツ国境の小都市だった。それから首都ワルシャワのマゾビエツキ県に広がり、南部の炭鉱地帯シロンスク地方に拡大、全地域で感染者が確認された。

ポーランドの大学は2月後半から後期が始まっていたが、中国、日本はじめ、イタリアなどへの感染拡大を受けて、ウッジ大学は、3月９日から高齢者社会人対象コースを休校、11 日から全講義、会議等を中止し、大学封鎖措置をとった。寮にいた学生たちは、留学生以外全員帰省し、空いた室の一部は濃厚接触者用の観察保護施設に変わった。